

カズオ・イシグロの歴史小説

東京女子大学特任教授 原 英一

カズオ・イシグロ作品リスト（短編を除く）

<i>A Pale View of Hills.</i> 1982.	『遠い山なみの光』 [幽かなる丘の眺め]
<i>An Artist of the Floating World.</i> 1986.	『浮世の画家』
<i>The Remains of the Day.</i> 1989.	『日の名残り』
<i>The Unconsoled.</i> 1995.	『充たされざる者』 [慰められざる（成仏できない）者たち]
<i>When We Were Orphans.</i> 2000.	『わたしたちが孤児だった頃』
<i>Never Let Me Go.</i> 2005.	『わたしを離さないで』
<i>The Buried Giant.</i> 2015.	『忘れられた巨人』 [埋葬された巨人]

My Twentieth Century Evening and Other Small Breakthroughs: The Nobel Lecture. 2017.

『特急二十世紀の夜と、いくつかの小さなブレークスルー——ノーベル文学賞受賞記念講演』
[私の二十世紀の夕べと、いくつかの小さな飛躍]

タイトルの日本語訳にいくつかの問題点がある

『充たされざる者』 → *The Unconsoled* 「慰められない者たち」とは「成仏できない死者たち」のことである
 『忘れられた巨人』 → 英語の buried は「埋葬された」が第一義、「忘れられた」とするのは、誤訳ではないが、メタファー
 解釈の自由を読者から不当に奪っている
 『特急二十世紀の夜』 → 『特急二十世紀』という映画のタイトルをそのまま使っては含蓄が失われる
 Evening は「夜」ではなく「夕べ」、20世紀の終わり = 21世紀前夜
 「私の」を出さなければならない 川端康成『美しい日本の私』

- イシグロの小説はさまざまなジャンルにわたる

『遠い山なみの光』 [幽かなる丘の眺め]	} 英語で書かれた古典的日本小説
『浮世の画家』	
『日の名残り』	古典的イギリス小説
『充たされざる者』	不条理小説
『私たちが孤児だった頃』	探偵小説
『わたしを離さないで』	サイエンス・フィクション
『忘れられた巨人』 [埋葬された巨人]	ファンタジー

- そこには「記憶」と「戦争」という一貫したテーマがある

- イシグロの文学は、その全体が、「戦争の世紀」、20世紀を描く歴史小説となっている

私にとってはるかに重要なのは、彼の作品のそれぞれが互いに補い合い、支え合っているということである。……問題は、一つの偉大な小説をときどき作り出すといった単純なことではない。というより、イシグロには、あるヴィジョンがあり、マスター・プラン (a master plan) があって、それが彼の作品を形成しているのだ——彼が書く一つ一つの小説は、この、より大きなマクロの語り (this larger macro-narrative) 構築のための一歩一歩になっているのである。

Haruki Murakami, "Foreword: On Having a Contemporary Like Kazuo Ishiguro." Sean Matthews and Sebastian Groes, eds., *Kazuo Ishiguro: Contemporary Critical Perspectives*.

この講義では、カズオ・イシグロの小説について、次の命題を証明していく

- イシグロの語りは日本文学的「沈黙の語り」である
- イシグロの小説は、全てが「戦争の世紀」を描く「歴史小説」である
- イシグロの創作活動は、「戦争の世紀」に生きた死者たちを弔い、埋葬しようとする、フロイト／デリダ的「喪の作業」である

本日の講義の内容は、以下の論文から発展したものであることをお断りしておきます。

この論文は東京女子大学の機関リポジトリから全文にアクセスすることができます。

原英一「カズオ・イシグロの文学——マジック・リアリズムと沈黙の語り——」

『東京女子大学比較文化研究所紀要』78巻（2017年），pp. 41-57

「英語らしい英語」で書かれた「古典的日本文学（沈黙の語り）」

A Pale View of Hills by Kazuo Ishiguro

CHAPTER ONE

Niki, the name we finally gave my younger daughter, is not an abbreviation; it was a compromise I reached with her father. For paradoxically it was he who wanted to give her a Japanese name, and I — perhaps out of some selfish desire not to be reminded of the past — insisted on an English one. He finally agreed to Niki, thinking it had some vague echo of the East about it.

She came to see me earlier this year, in April, when the days were still cold and drizzly. Perhaps she had intended to stay longer, I do not know. But my country house and the quiet that surrounds it made her restless, and before long I could see she was anxious to return to her life in London. She listened impatiently to my classical records, flicked through numerous magazines. The telephone rang for her regularly, and she would stride across the carpet, her thin figure squeezed into her tight clothes, taking care to close the door behind her so I would not overhear her conversation. She left after five days.

She did not mention Keiko until the second day. It was a grey windy morning, and we had moved the armchairs nearer the windows to watch the rain falling on my garden.

“Did you expect me to be there?” she asked. “At the funeral, I mean.”

“No, I suppose not. I didn’t really think you’d come.”

“It did upset me, hearing about her. I almost came.”

“I never expected you to come.”

“People didn’t know what was wrong with me,” she said. “I didn’t tell anybody. I suppose I was embarrassed. They wouldn’t understand really, they wouldn’t understand how I felt about it. Sisters are supposed to be people you’re close to, aren’t they. You may not like them much, but you’re still close to them. That’s just not how it was though. I don’t even remember what she looked like now.”

“Yes, it’s quite a time since you saw her.”

“I just remember her as someone who used to make me miserable. That’s what I remember about her. But I was sad though, when I heard.”

Perhaps it was not just the quiet that drove my daughter back to London. For although we never dwelt long on the subject of Keiko’s death, it was never far away, hovering over us whenever we talked.

Keiko, unlike Niki, was pure Japanese, and more than one newspaper was quick to pick up on this fact. The English are fond of their idea that our race has an instinct for suicide, as if further explanations are unnecessary; for that was all they reported, that she was Japanese and that she had hung herself in her room.

遠い山なみの光 [幽かなる丘の眺め]

小野寺健 訳

第一章

ニキ、さいごにきました下の娘の名はべつに愛称ではない。これは、わたしと彼女の父親との妥協の産物だった。話は逆のようだが、日本名をつけたがったのは夫のほうで、わたしはひょっとすると過去を思い出したくないという身勝手な気持ちがあったのか、あくまでも英国名に固執したのである。夫はニキという名にどことなく東洋的なひびきがあると思って、さいごには賛成したのだった。

ニキは、今年の初めにわたしに会いにきた。四月だった。まだ寒い日がつづいていて、よく雨が降った。彼女はもっと長くいるつもりだったのかもしれない。けれども、この田舎家と、あまりにも静かな環境になじめなくて、ロンドンの生活にもどりたくなったのがすぐにわかった。ニキはいろいろしながらわたしのクラシックのレコードを聴き、山のような雑誌のページをペラペラとめくっていた。電話も定期的にかかってきた。すると彼女はタイトな服にきっちりつんだ体で大股にカーペットの上を歩いていき、わたしに盗み聴きされないように、かならず背後のドアを閉めた。ニキは五日で帰った。

ニキが景子の話を持ち出したのは、二日目になってからだった。その日の朝は曇っていて風がつよかつたが、わたしたちはアームチェアを窓ぎわへ持つていって、庭に降る雨を眺めていた。

「わたしが出ると思っていた？」とニキは訊いた。「お葬式のことだけ?」

「思わなかつたわ。あなたが来るとは考えもしなかつたわよ」

「たしかにびっくりしたわ、姉さんのことを聞いたときは。来ようかと思ったほど」

「ぜつたい来ないと思っていたわ」

「みんな、わたしがどうしたんだろうと不思議がつたのよ」ニキは言った。「誰にも教えなかつたから。動搖するの人が人目にもわかつたんだと思うわ。のの人たちには理解できっこないのよ。わたしの気持ちなんか、わかるはずがないの。姉妹なら当然親しいんだときめてかかるでしょ。たいて好きじゃなくても、親しいことに変わりはないときめてかかるのよね。でも、そこが見当ちがいなのよ。わたし、今じや姉さんの顔さえはっきりおぼえていないんすもの」

「そうね、あなたはもうずいぶん会つていなかつたから」

「わたしがおぼえているのは、ただ、姉さんに会うとかならずみじめな思いをしたということだけ。思い出といったら、それだけなのよ。それでも悲しかつたわ、話を聞いたときには」

娘が追い立てられるようにロンドンへ帰つてはいたのは、ただ静かすぎるせいだけではなかつたのかもしれない。景子の死についてはくどい話は一度もしなかつたのに、話しているときのわたしたちはたえずそれが気になって、忘れるることはできなかつたのである。

景子は、ニキとはちがつて純粋の日本人だった。その事実を書き立てた新聞は、一紙にとどまらない。イギリス人は、それ以上の説明はいらないとでもいわんばかりに、日本人には本能的な自殺願望があるという自分たちの見方に固執する。新聞はそれだけしか書かなかつた。景子は日本人で、自室で首を吊つたということしか。

マサオ・ミヨシ(1928-2009)の現代日本小説論

マサオ・ミヨシ(三好将夫)は1928年東京生まれ、東京大学英文学科を卒業後、ニューヨーク大学で博士号を取得、カリフォルニア大学サンディエゴ校教授だった。最初はイギリス・ヴィクトリア朝小説を研究し、*The Divided Self: A Perspective on the Literature of the Victorians*. New York: New York UP and London UP, 1969を出版。その後は、日米文化交流史の研究を中心に行った。『我ら見しままに——万延元年遣米使節の旅』(平凡社、1984年; *As We Saw Them: The First Japanese Embassy to the United States*, 1979)、『オフ・センター——日米摩擦の権力・文化構造』(平凡社、1999; *Off Center: Power and Culture Relations between Japan and the United States*, 1991)などの著作がある。

Accomplices of Silence: The Modern Japanese Novel (Berkeley: University of California Press, 1975) はミヨシの二冊目の著作。

『沈黙の共犯者たち』で、ミヨシは、明治以降の日本近代小説について、二葉亭四迷、夏目漱石、森鷗外、太宰治、川端康成、三島由紀夫等を取り上げ、英米の一般読者向けに、その特質を詳細に解説している。俳句に代表されるように、日本の文学では、語られる部分よりも語られない部分、「沈黙」こそが重要である。その日本の特質が、明治以降の西欧文化との衝突で生まれた新しい文学形式である「小説」にどのような形で継承され、あるいは変容しているかが中心的テーマとして論じられている。

Perhaps more important than any other factor in this whole problem of language and style is the typical Japanese dislike of the verbal. It might be said that the culture is primarily visual, not verbal, in orientation, and social decorum provides that reticence, not eloquence, is rewarded. Similarly, in art it is not articulation but the subtle art of silence that is valued. . . .

I do not believe it an overstatement to say that writing in Japanese is always something of an act of defiance. Silence not only invites and seduces all would-be speakers and writers, but is in fact a powerful compulsion throughout the whole society. To bring forth a written work to break this silence is thus often tantamount to the writer's sacrifice of himself, via defeat and exhaustion.

Masao Miyoshi, *Accomplices of Silence: The Modern Japanese Novel*, "Preface", xv.

うであった。魔が通りかかるて山を鳴らして行つたかのよ
うであった。音はやんだ。
風の音か、海の音か、耳鳴りかと、信吾は冷
静に考えたつもりだったが、そんな音などしな
かつたのではないかと思われた。しかし確かに
山の音は聞いていた。

遠い風の音に似ているが、地鳴りとでもいう
深い底力があつた。自分の頭のなかに聞えるよ
うでもあるので、信吾は耳鳴りかと思って、頭
を振つてみた。
音がやんだ後で、信吾ははじめて恐怖におそ
われた。死期を告知されたのではないかと寒け
がした。

八月の十日前だが、虫が鳴いている。
木の葉から木の葉へ夜露の落ちるらしい音も
聞える。
そうして、ふと信吾に山の音が聞えた。
風はない。月は満月に近く明るいが、しめつ
ぽい夜氣で、小山の上を描く木々の輪郭はぼや
けている。しかし風に動いてはいない。
信吾のいる廊下の下のしだの葉も動いていな
い。
鎌倉のいわゆる谷(やと)の奥で、波が聞える
夜もあるから、信吾は海の音かと疑つたが、や
はり山の音だった。

川端康成『山の音』

And yet the attractiveness of the passage does not depend entirely on the mere representation of the old man's state of mind. The man and his presence approach transparency as we begin almost to hear *through* Shingo the ominous sound of the mountain. Shingo himself is not really very substantial in this moonlit reality; rather it is his instrumental role in making accessible the wide world that spreads around him. For Shingo, as for Kawabata, the awareness of the large margins of the world around human beings and their actions, the large area of silence that stays intact despite human speech and the words of the novel—that is what powerfully informs his mind.

Accomplices of Silence, 118.

しかし、この一節の魅力は、老人の精神状態をただ表現することに全面的に依存しているのではない。不気味な山の音を、われわれが真吾を通して聞き始めるにつれて、その人物とその存在が透明に近づいていく。この月光に照らされた現実の中で、信吾自身は実は非常に実体があるわけではない。むしろ重要なのは、彼がその周囲に広がっている広大な世界を手に届くものにするという補助的な役割を果たしていることなのだ。信吾にとっても、川端にとっても、人間とその行為の周囲にある世界の大きな外縁、人間の語りと小説の言語にもかかわらず無傷のままの巨大な沈黙の領域——それこそが彼の精神に強烈に充満しているものなのだ。

イシグロと川端康成の『山の音』については、莊中孝之氏の示唆に富む論考がある。
莊中孝之『カズオ・イシグロ “日本”と“イギリス”の間から』(春風社、2011)

イシグロ文学にある「戦争」の影と沈黙

『遠い山なみの光』(1982)
『浮世の画家』(1986)
『日の名残』(1989)
『充たされざる者』(1995)

『わたしたちが孤児だった頃』(2001)
『わたしを離さないで』(2005)
『埋葬された巨人』(2015)

第二次大戦後間もない長崎が舞台、背景には原爆の惨禍
国威高揚の作品を書いていた画家の第二次大戦後の姿
第一次大戦終結時から第二次大戦後までを生きた執事の回想
カフカ的「不条理小説」、「戦争」は出てこない——しかし、その背後にはホロコーストの影が見える。主人公のライダーを除く全ての登場人物は死者たちである。
二十世紀前半、辛亥革命から日中戦争の上海が主たる舞台
「改變歴史ものSF」、「戦争」は出てこない——しかし、その背後には、『充たされざる者』と同様、ホロコーストの影が差す
歴史ファンタジー——その背後にはユーゴスラヴィア内戦とルワンダ虐殺がある

冷戦の終結で歴史そのものが終わった？

アメリカのネオコン、フランシス・フクヤマは、東西冷戦が、ソビエト連邦の崩壊、西側の勝利で終わったとき、「歴史の終わり」を宣言し、一時もてはやされた。

「今われわれが目撃しているかもしれないのは、単に冷戦の終わり、あるいは戦後史のある時期が去ったことではなく、歴史そのものの終わりである。つまり、人類のイデオロギーの進化と人間の統治の最終形態としての西洋のリベラルな民主主義の普遍化という終端である。」

(Francis Fukuyama, ‘The End of History?’)

戦争の世紀は終わらなかった

「長い二十世紀」は今も続く

イシグロが『忘れた巨人』(『埋葬された巨人』)の出版にあたっての『ザ・ガーディアン』紙のインタビューで語っていることによれば、この小説創作の契機となったのは、ユーゴスラヴィア内戦とルワンダ虐殺であった。

ユーゴスラヴィア崩壊の有様とルワンダでの少なくとも80万人が犠牲となったジェノサイドを、世界の人々とともに、見つめたとき、イシグロは明らかな恐怖だけでなく、「深い失望」を感じた。「なぜなら、ベルリンの壁の崩壊のあと、私たちは歴史の終わりに至ったとされ、平和な状況がやってくるという思いを抱いた…ところが、突然、強制収容所が、絶滅収容所が、スレブレニツァの虐殺が、ヨーロッパの真中に出現したのです…驚くべきことに、何十年もの間、平和に暮らし、お互いに家族ぐるみで親しく交流していた隣人同士が、差別し合い、殺し合ったのでした。」(The Guardian, Alex Clarkによるインタビュー)

歴史ファンタジー『埋葬された巨人』

カズオ・イシグロが、前作『わたしを離さないで』(Never Let Me Go, 2005)以来、10年ぶりに刊行した長編『埋葬された巨人』(The Buried Giant, 2015)は、伝説のアーサー王(King Arthur)の死後間もなくの頃(アーサー王の死は意図的に不明確にされている)、紀元5世紀末か6世紀初め頃のブリテンを舞台に設定している。しかし、イシグロが描き出す、その時代のブリテンは、歴史的事実とは乖離した、ファンタジーの世界である。そこには、人間のみならず、超自然の生き物たち、人食い鬼(ogres)、クウェリグ(Querig)というドラゴン、ピクシー(小鬼pixie)などがうごめいている。ヒロイック・ファ

ンタジー(heroic fantasy)に出てきそうな屈強なサクソン人の戦士、さらには、アーサー王の「円卓の騎士」の一人、サー・ガウェイン(Sir Gawain)までが登場する。

主人公はAxlとBeatriceというブリトン人の老夫婦。二人が「息子の住む村」に向かって旅をする。その過程で過去の記憶が次第によみがえってくる。それは忘れていた方がよかったかもしれない、忌まわしい虐殺の記憶だ。今は平和に共存しているブリトン人とサクソン人は、かつては殺し合った。歴史上にやがて起こるはずのサクソン人によるブリトン人の大虐殺、ジェノサイドが予感されている。

1960年代のサイエンス・フィクションの「新しい波」(the New Wave)の騎手とされたJ.G. BallardがThe Buried Giantに与えた影響は非常に大きい。イシグロの最新作のタイトルがThe Buried Giantであるとアナウンスされたとき、ただちにバラードの短編‘The Drowned Giant’が想起された。アクスルとビアトリスが「島」に渡ろうとするところは、同じくバラードの短編‘The Terminal Beach’のエコーが響いている。「執着の浜辺」は、核実験場跡地の太平洋上の島をさまよう男の物語。いずれも短篇集The Terminal Beach(1964)所載。

**イシグロは「戦争」を直接には描かない、「沈黙」によって語る
(例えば、『遠い山なみの光』で、長崎の原爆への言及は間接的になされるのみ)**

なぜ彼は「戦争」そのものではなく、「普通の人々」の「記憶」の物語を綴るのか?

- (1) イシグロの文学は日本的な「語らない語り」、「沈黙の文学」だからである
- (2) 戦争の世紀に生き、非業の死を遂げた幾千万の「名もなき普通の人々」は、「記憶」によって、よみがえり、生き続ける

イシグロの文学は、戦争の世紀の死者たちを弔おうとする「喪」の文学である

フロイト、デリダ、イシグロ、それぞれの「喪の作業」

フロイト「喪とメランコリア」

[愛する者を喪ったとき] 人は一つのリビード [リビドーをこの日本語版全集ではリビードと表記] 態勢から進んで立ち去ろうとはしない [ので] 現実からの背反と対象への固執とを全うすることさえある。通常は、現実に対する尊重が勝利を保つ。だが、現実による指図は…時間と備給エネルギーの多大な消費をともなって一つ一つ遂行される。そしてその間、失われた対象の存在は心的に維持される。

(『フロイト全集』第14巻、275)

デリダ『マルクスの亡靈』 マルクスを埋葬しようとする喪の作業、フクヤマ批判

今日の若い人々 (“フクヤマの読者／消費者”というタイプの、あるいは“フクヤマ”自身というタイプの人々) の多くには、おそらく十分にはもう分からぬのだろう。“歴史の終わり”、“マルキシズムの終わり”、“哲学の終わり”、“人間の終わり”、“最後の人間”といった終末論的テーマは、40年前、1950年代に、我々の日々の糧であったということが。

(ジャック・デリダ『マルクスの亡靈たち』)

イシグロ Never Let Me Go ホロコーストの犠牲者たちのための喪の作業

出版前に、同じ研究室にいたイギリス人教員Peter R.(現レーディング大学教授)と私が交わした会話

私 「イシグロの最新作のタイトルがアナウンスされたよ。Never Let Me Goだって」

Peter R. 「なんだそりや、まるで昔のポップ・ミュージックのタイトルみたいじゃないか」

その後、出版された本を読んで、彼の直感が図星だったことがわかり、驚いた。どうして彼にはわかったのか? 英語のネイティヴだったからだ。イシグロの驚嘆すべき(日本人から見れば)英語感覚が、またも証明された。

わたしを離さないで

1990年代末、イギリス

第一章

わたしの名前はキャシー・H。いま三十一歳で、介護人をもう十一年以上やっています。ずいぶん長く、と思われるでしょう。確かに。でも、あと八ヶ月、今年の終わりまではつづけてほしいと言われていて、そうすると、ほぼ十二年きっちり働くことになります。ほんとうに長く勤めさせてもらったものです。わたしの仕事ぶりが優秀だったから？さあ、それはどうでしょうか。仕事がとてもよくできるのに二、三年でやめさせられる人がいますし、まるで役立たずなのに十四年まるまる働きとおした人も、少

なくとも一人知っています。ですから、長いからといって自慢にはなりません。ただ、わたしの仕事ぶりが気に入っていたのは確かで、わたし自身、自負めいたものがないわけではありません。わたしが介護した提供者の回復ぶりは、みな期待以上でした。回復にかかる時間は驚くほど短く、「動搖」に分類される提供者など、四度目の提供以前でさえほとんどいませんでした。あら、これはやはり自慢でしょうか。でも、仕事をちゃんとやって、提供者を「平静」に保てたというのは、わたしにはとても大きな意味のあることです。ある種の勘が備わったのだと思います。いつ付ききりで落ち着かせるか。いつ見守っているだけにするか。いつ言いたいことをとことん聞いてやるか。いつ突き放し、いいかげんになさいと言うか。(土屋政雄訳)

[収容所のフェンス]

ルーシー先生の英語の授業で、詩をいくつか読んでいました。何かのきっかけで、第二次世界大戦で捕虜になり、収容所に入れられた兵士のことが話題になりました。男子生徒の一人が、収容所を囲むフェンスには電気が流れていたそうだと言い、別の生徒がそれを受けて、フェンスに触るだけで好きなときに自殺できるなんて、そんなところに住むのは妙な感じのものだったろう、と言いました。当人は真面目な気持ちで言ったのかもしれません、わたしたちはそれをただの冗談と受け止めました。……

わたしは、その間もずっとルーシー先生を観察しつづけました。そして、クラスのそんな騒ぎを見ていた先生の顔から、ほんの一瞬でしたが、血の気が引いたように思います。でも、先生はすぐにいつもの表情に戻り、にっこり笑って、こう言いました。「ハールシャムのフェンスに電流が通じていなくてよかったこと。事故は起こるものですからね」

先生の声はとても低く、生徒の大聲に搔き消されて、多くの耳には届かなかったでしょう。でも、わたしには「事故は起こるものですからね」と、はっきり聞こえました。事故？ どんな事故が、どこで……？ でも、聞きとがめる人はほかになく、わたしたちはまた詩の鑑賞に戻りました。(土屋政雄訳)

[恐怖の森]

森については、さまざまな恐怖の言い伝えがありました。たとえば、わたしたちがハールシャムに来る少し前、一人の男の子が友達と大喧嘩して、ハールシャムの敷地外へ逃げ出したそうです。二日後、その子は森で発見されました。体が木に結わえつけられ、両手・両足が切り落とされていたと言います。女の子の幽霊が森の中をさまよっているという噂もありました。もとハールシャムの生徒で、どうしても外の世界が見たくて、ある日、フェンスを乗り越えて出ていきました。はるか昔のことです。当時の保護官はわたしたちの頃よりずっと厳しく、むしろ残酷に近かったとも聞きます。外の世界を見た女の子は、また中に入れてもらおうとしましたが、許されませんでした。長い間、フェンスの近くをうろつき、戻してくれるよう懇願しつづけましたが、誰も耳を貸してくれる人はなく、結局、どこかへ迷っていき、そこで何かが起こって死んでしまいました。そして、その幽霊が、ハールシャムを見下ろす森の中をいまもさまよいつづけ、戻してくれと言っているのだそうです。(土屋政雄訳)

[Ending: キャシーの喪の作業] 以下は E.H. 訳

私は耕作地の広がりの前に立っていました。二本の有刺鉄線が張られたフェンスがあって、畑に踏み込めないようになっており、何マイルにもわたって風を遮っているのは、そのフェンスと頭上に伸びる三、四本の木の集まりだけであることが分かりました。フェンス全体に、とくに下の有刺鉄線には、ありとあらゆるゴミが引っかかり、絡みついていました。海岸に打ち寄せられる屑のようでした。そのいくつかは風によって何マイルも何マイルも運ばれてきて、やっとこの木立と二本の鉄線にたどりついたに違いありません。木立の枝にも、破れたプラスチックの端切れや古い買い物袋の切れ端が、ぱたぱたとなびいているのが見えました。そこに立って、この奇妙なゴミを見て、その空っぽの畑を越えて吹き寄せてくる風を感じているときに、はじめて私はちょっとした空想を始めたのでした。なぜなら、結局ここはノーフォークだったし、彼を失ってから2週間しか経っていないからです。私はゴミのことを、枝に引っかかった、ぱたぱたとなびくプラスチックのことを、フェンスに沿って絡みついた雑多なものの海岸線のような広がりを思いつつ、目を半分閉じ、空想したのです。こここそ私が子どものときから失ってきた全てのもの打ち上げられるところだ、と。今私はその前に立っていて、もし十分長く待つていれば、畑の向こうの地平線に小さな姿が現れ、それがだんだんと大きくなってくる、やがて、それがトミーだってわかる、彼が手を振り、もしかしたら呼びかけさえしてくれるかもしれない。空想は決してそれを越えて進むことはありませんでした——そうはさせなかつた——そして、涙が私の顔をころがり落ちてはいましたが、私はすすり泣いてはおらず、自制心を失ってもいませんでした。私は少し待ってから、車に戻り、そこがどこであろうと、私が行くことになっている場所へ向けて、走り去りました。

イシグロの過去と現在『私の二十世紀のタベ ノーベル文学賞受賞記念講演』E.H.訳

In October 1999, I was invited by the German poet Christoph Heubner on behalf of the International Auschwitz Committee to spend a few days visiting the former concentration camp. . . . I felt I'd come close, geographically at least, to the heart of the dark force under whose shadow my generation had grown up. At Birkenau, on a wet afternoon, I stood before the rubbed remains of the gas chambers—now strangely neglected and unattended—left much as the Germans had left them after blowing them up and fleeing the Red Army. They were now just damp, broken slabs, exposed to the harsh Polish climate, deteriorating year by year. My hosts talked about their dilemma. Should these remains be protected? Should Perspex domes be built to cover them over, to preserve them for the eyes of succeeding generations? Or should they be allowed, slowly and naturally, to rot away to nothing? It seemed to me a powerful metaphor for a larger dilemma. How were such memories to be preserved? Would the glass domes transform these relics of evil and suffering into tame museum exhibits? What should we choose to remember? When is it better to forget and move on?

I was forty-four years old. Until then I'd considered the Second World War, its horrors and its triumphs, as belonging to my parents' generation. But now it occurred to me that before too long, many who had witnessed those huge events at first hand would not be alive. And what then? Did the burden of remembering fall to my own generation? We hadn't experienced the war years, but we'd at least been brought up by parents whose lives had been indelibly shaped by them. Did I, now, as a public teller of stories, have a duty I'd hitherto been unaware of? A duty to pass on, as best I could, these memories and lessons from our parents' generation to the one after our own? (27-9)

One evening in early 2001, in the darkened front room of our house in North London (where we were by then living), Lorna and I began to watch, on a reasonable quality VHS tape, a 1934 Howard Hawks film called *Twentieth Century*. The film's title, we soon discovered, referred not to the century we'd then just left behind but to a famous luxury train of the era connecting New York and Chicago. As some of you will know, the film is a fast-paced comedy, set largely on the train, concerning a Broadway producer who, with increasing desperation, tries to prevent his leading actress going to Hollywood to become a movie star. (31-32)

1999年10月、私は国際アウシュヴィッツ委員会の代表であるドイツの詩人、クリストフ・ホイプナーに招かれて、かつての強制収容所を数日間訪問することになりました。……私は、私の世代がその影の下で成長した、あの暗黒の力の中心に、少なくとも地理的には近づいたと感じました。ある雨の午後、ビルケナウで、私は瓦礫と化したガス室の残骸の前に立ったのです——今は奇妙にも無視され、うち捨てられている——赤軍から逃げるドイツ軍がそこを爆破して去ったときとほとんど変わらない状態でした。そこは今はただ湿った、壊れた瓦礫に過ぎず、厳しいポーランドの気候にさらされて、年ごとに風化しつつありました。私のホストたちは、自分たちのジレンマを語りました。この遺物は保護すべきだろうか？ 次の世代に見てもうために、それを覆うガラスのドームを建てるべきだろうか？ それともゆっくりと自然に朽ち果て、消えるに任せるべきだろうか？ 私には、それは、より大きなジレンマのメタファーのように思われました。そのような記憶はどうやって保存すべきなのか？ ガラスのドームは、この悪と苦しみの遺物をあたりさわりのない博物館の展示物に変えてしまうのだろうか？ 私たちは何を選んで記憶すべきなのか？ 忘れ去り、前進するほうがいいのは、いつなのか？

私は44歳でした。そのときまで、私は第二次大戦、その恐怖とその勝利を、親の世代のものと考えてきました。しかし、今、これらの出来事を直接に目撃した多くの人々が、間もなく世を去るだろうということに思い当たったのです。そうしたら、どうなるのか？ 記憶するという責務は、私自身の世代にかかるくるのだろうか？ 私たちは戦争の年月を経験してはこなかったが、その年月によって消しがたい刻印を受けた親たちの手で、少なくとも育てられてきたのでした。物語の公共の語り手としての私は、今、これまで気づかなかつた義務を負っているのだろうか？ これらの記憶や教訓を、私たちの親の世代から私たち自身の後の世代へと、最善を尽くして伝えていくという義務が？ (27-9)

2001年初めのあるタベ、(その頃私たちが住んでいた)ノース・ロンドンの暗い居間で、ローナと私は、けっこう良質なVHSテープで、『二十世紀』というハワード・ホークス監督の映画を見はじめました。すぐにわかったことですが、この映画のタイトルが指していたのは、私たちがちょうど後にしてきた世紀ではなく、ニューヨークとシカゴを結んでいた、その時代の有名な豪華列車〔特急二十世紀〕でした。皆さんの何人かはご存知のように、この映画は、その列車を大部分舞台に使った、展開の速いコメディで、ブロードウェイのプロデューサーが、ハリウッドに行って映画スターになろうとする主演女優をなんとか引き留めようとして、必死に努力するというものです。

(31-32)

So we come to the present. I woke up recently to the realisation I'd been living for some years in a bubble. That I'd failed to notice the frustration and anxieties of many people around me. I saw that my world—a civilised, stimulating place filled with ironic, liberal-minded people—was in fact much smaller than I'd ever imagined. 2016, a year of surprising—and for me depressing—political events in Europe and in America, and of sickening acts of terrorism all around the globe, forced me to acknowledge that the unstoppable advance of liberal-humanist values I'd taken for granted since childhood may have been an illusion.

I'm part of a generation inclined to optimism, and why not? We watched our elders successfully transform Europe from a place of totalitarian regimes, genocide and historically unprecedented carnage to a much-envied region of liberal democracies living in near-borderless friendship. We watched the old colonial empires crumble around the together with the reprehensible assumptions that underpinned them. We saw significant progress in feminism, gay rights and the battles on several fronts against racism. (38–39)

I'll have to carry on and do the best I can. Because I still believe that literature is important, and will be particularly so as we cross this difficult terrain. . . . So I am optimistic. Why shouldn't I be? (42–43)

こうして、私たちは現在へ達します。最近、私は、自分が何年間か泡の中で生きていたということを悟りました。私の周囲の多くの人々のフラストレーションや不安に気づかなかった。私の世界——皮肉屋でリベラルな考えの人たちで充たされた文明化された、刺激的な場所は、実は、私が想像していたよりはるかに小さかったのだ。2016年という、ヨーロッパやアメリカでの驚くべき——私にとっては氣の滅入るような政治的出来事の年、世界中での胸の悪くなるテロ行為の年が、私に認識させることになったのです——子供のときから私が当然のことと考えてきたりベラル・ヒューマニズムの価値観の止められない前進は、幻想なのかもしれない。

私は楽観主義に傾いている世代に属しています。それは当然でしょう？ 私たちは私たちの年長者たちが、ヨーロッパを専制政治、ジェノサイド、そして歴史上前例のない殺戮の場から、ほとんど境界のない友愛の中に生きるリベラル民主主義という、とても羨望される地域へと、変換することに成功するのを目にしてきました。私たちは古い植民地帝国が、それを支えていた非難されるべき前提もろとも、そこら中で崩壊するのを見てきました。私たちはフェミニズム、ゲイの権利、人種差別に対するいくつかの前線での闘いが意義ある前進を遂げるのを見てきました。(38–39)

私は続けなければなりません、最善を尽くさなければなりません。なぜなら、私は文学は重要である、とりわけ、この困難な地域を横断するときに重要である、と依然として信じるからです。[若い才能がいたるところで活躍している] ……だから私は樂観的です。そうでない理由があるでしょうか？ (42–43)

参考文献リスト

- J. G. Ballard 『J·G·バラード短編全集』 1～5. 東京創元社、2016.
- Jacques Derrida 『マルクスの亡靈たち—負債状況 = 国家、喪の作業、新しいインターナショナル』. 藤原書店、2007.
- Sigmund Freud 『フロイト全集』、岩波書店.
- Fukuyama, Francis. "The End of History?". *The National Interest*, Summer 1989. <http://www.wesjones.com/eoh.htm>.
- Ishiguro, Kazuo. *A Pale View of Hills*. London: Faber & Faber, 1982.
- . *An Artist of the Floating World*. London: Faber & Faber, 1986.
- . *The Remains of the Day*. London: Faber & Faber, 1989.
- . *The Unconsoled*. London: Faber & Faber, 1995.
- . *When We Were Orphans*. London: Faber & Faber, 2000.
- . *Never Let Me Go*. London: Faber & Faber, 2005.
- . *The Buried Giant*. London: Faber & Faber, 2015.
- . *My Twentieth Century Evening and Other Small Breakthroughs: The Nobel Lecture*. New York: Knopf, 2017.
- Miyoshi, Masao. *Accomplices of Silence: The Modern Japanese Novel*. Berkeley: U of California P, 1974.
- Murakami, Haruki. "Foreword: On Having a Contemporary Like Kazuo Ishiguro." Sean Matthews and Sebastian Groes, eds. *Kazuo Ishiguro: Contemporary Critical Perspectives*. London: Continuum, 2009.
- 川端康成 『山の音』. 新潮文庫、1957.
- 莊中孝之 『カズオ・イシグロ——“日本”と“イギリス”の間から——』. 春風社、2011.